

山形県「食」と「農」に関する教育実践活動応募様式

学校名	南陽市立荻小学校	校長名	小林 繁治
所在地	〒992-0582	TEL	0238-41-2101
	南陽市荻1033	FAX	0238-41-2106
担当教諭名	白 田 勝 文	e-mail	ogisyo@city.nanyo.yamagata.jp

取組内容

(1) 活動のテーマ (ねらい)

- 栽培活動を通して、作物を育てる苦労や工夫、収穫の喜びを体験し、自然や食物を大切にすることを培う。
- 自分たちで育てた作物を食材にして、学校宿泊や家庭科、生活科などで進んで活用して、地産地消を体験する。
- 「田んぼの先生」「畑の先生」など地域の方々を指導者に招いて、学校と地域との交流を深める。

(2) 学年・学級・人数 1～6学年 27名

(3) 開始年度 栽培学習 平成 7年度
 学校宿泊 平成14年度

(4) 活動の動機

本校では、長年身近にある地域素材を題材化し学習活動の中に体験活動を取り入れてきた。地域には田んぼや畑が多くあるが、農作業を手伝っている子どもは年々少なくなっている。また、食材なども自由に手に入るため、物を大切にするという気持ちが薄れている。

そこで、子どもたちと栽培活動に取り組むことで、次のことを育てていきたいと考えた。

- 作物が育つにはいろいろな作業と手間がかかることがわかる。
- 手間暇かけて育てた作物のおいしさ、大切さを感じる。
- 地域の人たちから栽培の方法について学ぶ。
- 自分たちが育てた食材について興味を持ち、調理方法を調べたり、実際に調理したりなど、積極的に活動できる子どもを育てたいと考えた。

(5) 活動の内容

① 指導者依頼と栽培計画の検討 (5月)

- ・ JAおきたま吉野支店を通して、水田、畑の指導者を依頼する。
- ・ 子どもたちが植えてみたいものを聞き、それをもとに担任と畑の指導者とで栽培する作物、作付け場所、植え付け時期を話し合う。
- ・ 学校宿泊で使用する食材の野菜を全校生で植え、学校宿泊の斑毎に1種類担当し、草むしりや収穫などの栽培・管理を行う。

② 1・2年の活動

- ・ 畑へのマルチかけと草とり
- ・ サツマイモの植え付け(5月)と収穫(10月)・・・生活科で調理、給食の食材
- ・ 秘伝豆の植え付け(6月)と収穫(9・10月)・・・ゆで豆や収穫祭のじんだんのあんに、

大豆にして豆腐づくりを予定

- ・ ミニトマトの種まき、植えかえ、追肥、収穫(8～9月)
 - ・・・2年生1人1鉢ずつ受け持ち、世話をする。

③ 3・4年の活動

- 米作り(5月～10月)
- 地域の方を指導者をお願いして、田植え、稲刈り、乾燥、脱穀、精米を体験する。収穫感謝祭のもち米に使用する。

スイカの植え付け・マルチかけ(5月)と収穫(8月)・・・全校生で食べる。

④ 5・6年の活動

- そば栽培(7～11月)
 - 地域のそばやさんを指導者をお願いし、種まきと収穫、そば打ちを体験する。

- カボチャの植え付け(6月)と収穫(8～9月)

学校宿泊、給食の食材、カボチャ饅作り(いきいき活動)

- 親と子の食農体験(7月21日) 食習慣の大切さを学習し、栽培した食材を使いクッキング教室を開催する。

講師 山形県食と緑の交流プラザコーディネータ 遠藤 葉子 氏

⑤ 全校での活動

- 里芋の植え付け(5, 6月)と収穫(10月)

- サバイバルクッキング (いきいきわくわく学校宿泊 8/26～27)

- ・ 5月の段階で縦割りの班を決める。
- ・ 班ごとに学校宿泊で使用する野菜の担当を決めて、世話をする。
- ・ 栽培した野菜・・・ジャガイモ、キュウリ、トマト、トウモロコシ
- ・ グループ毎に分かれての夕食作り。畑で穫れたジャガイモ、キュウリ、トマト、トウモロコシ)を必ず使用する。
- ・ 次の日の朝食にカボチャスープを作る。

- 収穫感謝祭(2学期終業日)

- ・ 植え付けから収穫までお世話になった地域の指導者を招いて、各学年の栽培活動の発表や学校田で穫れたもち米を使った餅つき、会食(じんだん、納豆、あんこ、雑煮)をする。

(6) 実施体制 1, 2年の生活科、3～6年は理科や総合の時間を使って活動する。

- ・ 植え付けの時は主に全校生で行い、担当教員と地域の指導を中心に全担任、技能師が協力して指導にあたる。
- ・ 収穫は各学年毎に担外(技能技師)の協力を得ながら、学級担任が指導にあたる。
- ・ 「いきいきわくわく学校宿泊」は、担当教員を中心に指導し、5, 6年生がリーダーとなって計画、準備を行う。班ごとに担当教師を決めて指導・助言を行う。

(7) 工夫した点・苦労した点

- ・ 一昨年度から、子どもたちの希望をもとに、担任と指導者との打ち合わせを持ち、作付け場所、種類、植え付け時期などを決めていった。低・中・高学年で植えるのを1種類(低学年は2種類)に決めて、栽培活動を行った。
- ・ 子どもたちが責任を持って栽培してほしいことと、自分たちで育てた野菜を使って調理させたかったので、比較的世話のしやすい野菜を選び、班ごとに担当を決めて、収穫まで責任を持って世話をさせることができた。

- ・ 畑の指導者には、全学年の畑を見ていただき、植え付けや追肥、水の管理、生育状況や収穫の時期を適宜教えてもらった。
- ・ 今年は天候に恵まれ、ほとんどの野菜が収穫に恵まれた。しかし、休みや天候のため、収穫のタイミングがずれてしまい、大きくなりすぎたり実を腐らせたりして、だめにしてしまうことがあった。

(8) 協力を得た機関・個人

- おきたま農協吉野支店
- 地域の指導者 水田：山口 憲昭氏、畑：山口徳太郎氏・山口 新市氏・山口 恒助氏
そば：沖田 勝男氏
- 堆肥提供：山田要一氏（酪農家）
 - ・ 5, 6年生は地域のそば屋さんから来ていただいてそば打ちを体験している。
 - ・ 1月にお世話になった地域の方を招待して全校生と全保護者で収穫感謝祭を計画中である。収穫した作物について発表会や地域の先生方に対し感謝の意を表し、今年穫れたもち米を使い餅つきを行い、全員で会食する予定である。
(臼は保護者、杵は卒業制作による手作りのものを使用する)
 - ・ 収穫した大豆を利用し、地域の豆腐屋さんから豆腐作りを指導していただく予定である。

取組の効果

- ・ 毎日畑に出かけ、草をむしり、自分が担当した作物を責任持って世話をするなど、積極的に栽培に関わる子が増えてきた。
- ・ 学級担当の作物を1種類にしたので、世話がしやすくなった。
- ・ 食物を育てるためには、たくさんの労力が必要であり、また新鮮な野菜のおいしさや収穫の喜びを体験することができた。
- ・ 栽培した食材を使ったいろいろな調理方法を知ることができた。
- ・ 栽培学習で児童と教職員が地域の方々と交流することで、土作りや植え方など作物について様々なこと学ぶことができた。
- ・ 植物の成長の様子がよく分かり、理科の教材として利用することができた。
- ・ 今年度は、食農教育推進モデル校の指定をいただき、専門家による食習慣の指導や子どもたちが栽培した食材を使いクッキング教室を開催することができた。

今後の課題

- ・ 学級で植えるものについては、児童の希望を優先し、指導者との打ち合わせを持って、本数や作付け場所の計画を立てていく。特に多く収穫した場合の野菜の活用方法を検討していかなければならない。
- ・ 地域の先生の都合で急な変更が生じることがあり、柔軟な対応が必要である。
- ・ 限られた時数でどこまで指導者に依頼し、学級や全校での作業が可能なのか。特に夏期休業中の管理が課題である。
- ・ 収穫したものを調理実習や給食で活用する他、販売について検討したい。
- ・ 自然との関わりの中で学習のため、必ずしも計画通りには行かない。作業に時間がかかるので、総合的な学習の時間だけでは対応できず、他教科との関連を明確にする必要がある。
- ・ 地域の先生に頼っている面が多い。農作物への思いを膨らませるために、子どもたちの主体性をさらに引き出す工夫をしていかなければならない。